

東京成徳大学大学院心理学研究科
博士論文（要旨）

職業選択志向性に着目した
キャリア教育プログラムの検討
—境遇活用スキルに焦点を当てて—

2023 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

赤城 知里

職業選択志向性に着目したキャリア教育プログラムの検討を、計画された偶然性理論 (Planned Happenstance Theory) をもとにした境遇活用スキルに焦点を当てて行った。

研究 1 (第 2 章) では、大学生のキャリア教育における問題を振り返り、志望する仕事が決まらないという職業の未決定という状態を生み出す要因について、先行研究を概観した。

研究 2 (第 4・5 章) では、「とりあえず志向」(12 項目) と「やりたいこと志向」(4 項目) からなる職業選択志向性尺度を作成した。その尺度によりクラスター分析を行ったところ 3 つのクラスターが抽出され、その特徴から「やりたいこと志向群」「停滞群」「とりあえず志向群」と名づけられた。

また、就職活動時の職業選択志向性によって就職後の職務満足感に影響が見られるのか、さらに、境遇活用スキルが職業選択志向性と職務満足感にどのように関連するのか、検討した。その結果、とりあえず志向が高いと職務満足感は低く、やりたいこと志向が高いと職務満足感は高かった。また、とりあえず志向が低い場合、境遇活用スキルが高いと職務満足感が高いことが明らかになった。

研究 3 (第 6 章) では、境遇活用スキルを向上させるようなキャリア教育プログラムを構成し、その実施方法についても工夫をして、大学生を対象に実施した。境遇活用スキルと職業未決定についてプログラム前後の変化を研究 2 の 3 群で比較したところ、「やりたいこと志向群」と「停滞群」は、境遇活用スキルや職業決定傾向が高まったが、「とりあえず志向群」は変わらなかった。

研究 4 (第 7 章) では、研究 3 で構成したキャリア教育プログラムのどのような内容のプログラムのどのような活動が境遇活用スキルの向上

につながったのか、研究協力者への自由記述をもとに、質的な検討を行った。グループ活動や意識づけにより、主体的にプログラム内容に取り組むことを促したことにより、境遇活用スキル全般、特に興味探索スキルと開始スキルが高まったと考えられる。

本研究で示された結果を踏まえ、職業選択志向性3タイプの特徴および各タイプへのキャリア教育の在り方について、以下の考察がなされた。やりたいこと志向群は、就職活動への意欲が高く、境遇活用スキルも高い。選択基準もはっきりしているため、主体的に就職活動に取り組むことが可能だろう。停滞群は、職業選択動機づけや人生満足度が低く、就職活動への意欲が停滞していると考えられた。プログラムなどを契機にして就職活動に動き出し、動きながら情報を集めて職業選択の基準を考えて、職業を決めることが必要である。とりあえず志向群は、経済的な理由やゆとりある生活が職業選択の動機となり、条件にあった仕事をとりあえず選択する傾向がうかがえた。働くことには社会貢献の意味もあることを教育していく必要がある。